

給ひ候へ共、御一家のきんだちの、西海の波に、たゞよはせ給ふ御事が、心ぐるしく候て、いまだあ
んどしても覺候はねば、心すこしおとしすへて、おつさまにこそ、参り候はめとぞ申ける、大なご
んはづかしう、かた腹いたく思召て、誠に一門に引わかれて、おちとゞまつし事をば、我身ながら、
いみじとは思はね共、さすが命もおしう、身もすてがたければ、なまじゐにとどまりにき、此上は
くだらざるべきにもあらず、はるかのかのたびにおもむくに、いかでか見をくらざるべき、うけす思
はゞ、落とゞまつし時、などさはいはざりしぞ、大小事、一かう汝に社いひ合せしかと宣へば、むね
きよるなをり、かしくまつて申けるは、あはれ高きもいやしきも、人の身に、命程おしき物やは候
されば世をばすつれ共、身をばすてすところ、申つたへて候なれ、御とまりをば、あしとには存候
はず、兵衛の佐源朝も、かひなき命を、たすけられ参らせて候へば、社けふはかゝるさいはるにも
あひ候へ、るざいせられ候ひし時、こあま御前池禪尼の仰にて、あふみの國篠原の宿まで、をくりた
りし事など、今にわすれずと候なれば、御供にまかりくだりて候はゞ、さだめて引出物きやうお
うなどし候はんずらん、それに付ても、西海の波の上に、たゞよはせ給、御一家のきん達たち、又は
こうれい共の、かへりきかんする所も、いひがひなう覺え候、はるかのかのたびに、おもむかせ給ふ御
事は、誠におぼつかかなう思ひ参らせ候へ共、かたきをもせめに、御下り候はゞ、まづ一ぢんにこそ
候べけれ共、是は参らず共、更に御事かけまじ、兵衛の佐殿、たづね申され候はゞ、おりふしあひい
たはる事有と仰られ候べしとて、涙ををさへて、とゞまりぬ、是を聞侍共、みな袖をぞぬらしける、
略○下

〔平家物語 十一〕つぎのぶさいこの事

王城一のつよ弓せい兵なりければ、のと殿の矢さきにまはる者、一人もおとされずと云事な
し、中にも源氏の大將軍九郎義經を、只一やにいおとさんと、わらはれけれ共、源氏の方にも心え